

特集：ジェンダーと地理学

序

お茶の水地理が発行され、前半世紀となった。この間、教室に限らず様々な立場からお茶の水地理の企画編集が担われ、48号からはOG有志が企画編集している。本号の教室便りで、水野地理学コース主任が指摘された、男性が大半を占める日本の地理学界において女子大学で体系的に地理学を学べる教室のポジションの重要性は、そこで醸成され、培われてきた地理学的知の発信をこの場で実践することの意義を問うことにもなる。そしてこのことは、OG有志がお茶の水地理を継続させる意義として強調した、様々な立場や方法で地理学的知を発し、そのような場を共有することで、女性の多様なライフコースの可能性を担保する試みにもつながっている。お茶の水地理のこのような意義・目的に照らし、50号という節目の本号において、「特集」のテーマを「ジェンダーと地理学」とし、現教員及び卒業生から論考を寄せていただいた。

本特集に含まれる各稿について簡単に紹介したい。まず、石塚は、フェミニスト地理学者リンダ・マクドウェルの有名な問い「スタイルを損なうか衣服を作り直すか」、そして、これと関連する「何がより地理学的な見解でありうるのか」という問いを軸に、過去15年のフェミニスト地理学における議論を検討し、フェミニスト地理学の本質と意義に迫った。熊谷は、「ジェンダーと開発」における男性および男性性の位置について、自身のこれまでの実践および日本の非正規雇用の事例を基に考察し、さらに、これと地理学／地域研究との関わり方を模索している。葉は、植民地統治下台湾においていかに植民地権力が浸透していったのかを私的空間、特に家庭の女性の役割に着目し、

家庭の中で女性が疎外される一方で、教育の場では女性への支配者からの抑圧を受けるという、家長と植民地権力のせめぎ合いが女性をめぐって展開していたことを指摘する。池谷は、子育ての環境について、妊娠・出産の支援策に焦点を当てて日本とイギリスを比較し、日本の現在の子育て支援のあり方の問題点を示唆した。影山は、ハワイに移住した日本人女性に目を向け、彼女たちが作る社会的ネットワークとその活動を紹介し、これらが彼女たちのハワイにおけるアイデンティティや生活に与える影響について述べた。

その他、特集の外に位置づけられているが、関村がジェンダーの視点から見た都市郊外空間の変容を女性のみならず男性退職者に着目して地域への住民参加について分析した博士論文を要約し、片岡は自然地理学の視点から土佐湾台風を被災した女性たちの経験記録を「書評」している。このように、多角的な視点からの「ジェンダーと地理学」に関する論考等がそろい、これらを共有する場となった。

最後に、本号のもう一つの特集である「『お茶の水地理』50号によせて」についてもふれておきたい。この特集は、地理学教室で教鞭を執られた先生方、およびそこから各方面へ巣立った卒業生たちによる随想を集めたものである。そこでは、現編集委員の知らない旧地理学教室やお茶の水地理学会の様子、「お茶の水地理」発刊の経緯、そして各分野で活躍する卒業生の様子が紹介されている。発行から半世紀を迎えた本誌に寄せられた想いもまた、読者に共有されれば幸いである。

(編集委員 森本 泉・吉田 道代)